

「秘密基地」おやじ夢中 ツリーハウス手作り励む 仙台



土台の下で小型模型と照合しながら建て方を話し合う、和田代表(右から2人目)らメンバー＝仙台市青葉区の蒲沢山



土台がほぼできたツリーハウス。木上にログハウスとテラスを設ける予定だ

立木を利用して、木の上に建てる「ツリーハウス」。仙台市青葉区の住民グループが、近くの里山でその建設に挑戦している。自然に親しむ場にしようと、「秘密基地」のような家造りに励むのは、平均年齢68歳の男たち。真冬でも、少年時代のように心躍らせ、作業に取り組んでいる。(報道部・松田佐世子)

青葉区郊外の住宅地、赤坂ニュータウン。裏山に入り、雪を踏みしめ冬枯れの木々の間を進むと、昨秋から建て始めたというツリーハウスが現れた。作業するのは「里山ねっと赤坂」(会員約60人、和田伸太郎代表)の中心メンバー約10人。主に60、70代の元気のいいおやじたちだ。

現役時代に建築現場にいたプロはわずかだが、日曜大工好きが多く、身のこなしは軽い。足がすくむような足場での作業も、ひよいとこなす。木づちが必要になれば、「道具も現地調達」とばかりに丸太とチェーンソーで手作りすることも。高所でよく作業する高村明さん(65)は「子どものころから木登り好き。少年に戻った気分」と楽しそうだ。

ツリーハウスの土台は、横にした丸太にドリルで穴を開け、ボルトで立木や柱に固定する。土台は奥行き、幅ともに5メートルで、高さは地上2.5メートル。その上に10平方メートルの平屋のログハウスとテラスを設け、階段を付ける計画だ。

初挑戦となるツリーハウス造り。「見晴らしのいい、夢のある空間にしたい。森の匂いや葉の揺れる音を感じながらおしゃべりしたり、星を眺めたりできれば」と和田代表は熱く語る。住民や地元小学生をはじめ、ハイキング客らにも開放することを思い描いている。

里山ねっと赤坂は、町内会の行事をきっかけに、2004年に設立された。赤坂地区は定年後の移住者らが多く、親睦を深めようと町内会で企画した里山散策が母体になった。「1回だけのイベントに終わらせたくない」と、広報担当の北原万紀夫さん(70)が当時を振り返る。

設立後は、近くの蒲(かば)沢山の国有林約262ヘクタールを借りる国の制度を利用。里山の大切さを実感

してほしいと、一般向けの山菜採りや沢遊びといった20以上の行事を用意。林道清掃や不法投棄されたごみの収集なども行っている。07年に林道脇に自分たちであずまやを建てたことで、自信がつき、ツリーハウスという夢にまで発展した。

実際にツリーハウス造りに取りかかったのは昨年6月。設計図は、定年後に2級建築士の資格を取得した和田さんが担当。用地は地権者の理解を得て、蒲沢山に隣接する民有林を格安で借りることができた。

材料の丸太は蒲沢山で伐採され、現場に放置されたヒノキの間伐材を国から安く譲り受けた。昨夏は猛暑の中、会員が数人がかりで長さ6～7メートルの間伐材を谷から引き上げて運び、女性メンバーも一緒に皮をむいた。

建築作業では、住宅メーカーOBの橘和英さん(72)が基礎づくりなどで助言。丸太引き上げ用のロープ滑車を周囲の立木に取り付ける際は、元タンカー船長の吉田康男さん(70)がロープ結びの経験を発揮するなど、メンバーの「総力戦」で挑んでいる。

完成は、若葉が茂る5月ごろを見込む。資金集めの課題は残るが、「文字通り、遊んで学べる山学校にしたい」とメンバー。夢は着々と形になりつつある。

2011年02月05日土曜日
